

目次

花と魚	……	3
百年の雪	……	67
艶やかな骨	……	127
上演記録	……	157

『はな
と
さかな
魚』

『花と魚』（二〇一四年版）

【登場人物】

酒田七生（さかた・ななお）…野生動物調査会社S E A・研究員。

須田大次（すだ・ひろつぐ）…須田水産専務。坂根ふるさと会の副会長。

須田千鶴（すだ・ちづる）…その妻。

須田日出子（すだ・ひでこ）…坂根ふるさと会婦人部部長。大次の義姉。

須田大和（すだ・やまと）…須田水産社長。坂根ふるさと会会長。

阿藤昇（あとう・のぼる）…大潮市坂根集落支援センターの所長。

小菅俊一（こすが・しゅんいち）…坂根診療所の医師。草野敦之（くさの・あつゆき）…大潮市坂根集落支援センター・職員。

草野那美江（くさの・なみえ）…その妻。

牟礼宇一郎（むれ・ういちろう）…漁師。

比嘉野花（ひがの・はな）…坂根神楽の舞い手

【時】 二〇一二年七月。

【場所】 宮崎県大潮市坂根地区の公民館および神楽宿。

【補足】

■集落支援センター■

架空の行政機関。山間部など交通の便が悪い集落に対し、行政的な手続きの窓口業務と、集落の自立的な運営の支援を行うため二〇〇九年に県が設立。役場支所の集落版ともいえる存在。

■坂根ふるさと会■

一九八九年、須田大海（ひろうみ）の発案により結成された自治組織。行政に頼らない財源つくりと村おこしを目的に運営されている。坂根集落の住民たちの意思が色濃く反映されるためふるさと会の会長は実質的な村長のような立場となる。行政機関とのやり取りもふるさと会が窓口となつて行われることが多い。

■第一幕・一場■

神楽宿の一室、

女たちが彫(え)り物を作っている。

須田日出子、須田千鶴、草野那美江。

そこへ比嘉野 花が来る。

花 「ねえねえ、見たけ? 見たけ? 調査員ん先生。

動物ん研究員やら言うかい暗えの想像しちよつ
たつちやけんよ、綺麗な顔しちよつたわ」

千鶴 「花ちゃん、遅刻ですよ」

花 「(気にせず) 那美江さん、見たけ?」

那美江 「話した」

花 「うそ、なんで?」

那美江 「(包帯を巻いた手をかざす) 被害者じゃもん。

聞き込み? 聞き取り?」

花 「やったと? やつたつけ?」

千鶴 「(たしなめる) 花ちゃん」

花 「千鶴奥さんは見たと?」

千鶴 「何をです?」

花 「調査員ん先生よ。あんげな綺麗な人、こん村に
はおらんわ。体ん芯がうずくやろ?」

千鶴 「ここは神聖な神楽宿ですよ。そういう話は外で
しなさい」

花 「なら外ん行こうや」

千鶴 「行きません」

日出子、彫り物を一つ完成させる。

日出子 「できた」

那美江 「日出子奥さん、ほんとん上手ね」

日出子 「もう何十年も作つちよつかいね」

と、次にとりかかる。

千鶴 「花ちゃんも、ほら」

花 「うち、こんげなんすつの苦手え。ちまちましち
よつちやもん。男衆もおらんし、気分乗らんわ。

日出子奥さん、大和くんはどこおつちやろか?
呼んだら来んかや?」

日出子 「(作業しながら) うちん子なら今日んほら、
なんやつたつけ?」

千鶴 「報告会」

日出子 「それん参加しちよつわ」

花 「大和くんが? なんで?」

日出子 「そりやあんだ、あん子、一応会長やかいね、
ふるさと会ん」

花 「どこでやつちよつと?」

日出子「どこやったつけねえ」

千鶴「公民館です」

花「うちちょっと見ちくつわ」

千鶴「いけません」

花「ちつとだけ」

千鶴「村の明日を決める大事な会です。ふざけ半分に

邪魔してはいけません」

花「ふざけちよらんよ。本気で男成分補給してえつよ」

千鶴、言い返したいが言葉が出ない。

那美江「道具を置く」 ああ、もうダメやわ。休憩。(包

帯を見せつける) がまんしちよったけん、これ」

花「まだ痛むと?」

那美江「ずきずき疼くとよねえ」

花「咬まれちかいどんくらいかね? 一週間?」

那美江「毒でんあつたつちやろか?」

千鶴「痛いのは分かりますが、少し休憩が多くありませんか?」

那美江「ちよつと、うちんこつ疑うつもり?」

千鶴「そういうわけでは……」

那美江「ほんとん痛えつちやかいね。あいたたた……」

千鶴「でも急がないと……」

日出子「彫り物を完成させる」できた」

花「早ええ」

那美江「それん上手やあ」

日出子「ほら、あんたどんも頑張んね。坂根神楽まで、もう十日ねえつちやかい。花ちゃんは下絵を書いて

ちみようか。千鶴さんも手え動かさんけ。那美江

ちゃんもよ」

花「はい」

那美江「了解」

千鶴「わ、分かりました」

女たち、彫り物の作業を始める。

日出子「作業しながら」 そう言えばよ、昨日も出た

げなね」

千鶴「はい?」

日出子「あれよ。大次さんかい聞いたつちやけんよ、

今度は干物工場ちや?」

千鶴「干し場を荒らされたそうです」

日出子「見張り立てちよったのんねえ」

千鶴「はい」

那美江「(作業しながら) 干物工場だけじゃねえとよ。

どこん家ん庭にでん入つちきちかい、干物やら漬物やら食べちいくげなが」

千鶴「最近では漁港で干してる網やロープにも噛り付いているようです」

日出子「でーじゃねえ。被害総額何億円け？」

千鶴「億は行つてません。百二十万……」

日出子「困ったよねえ。そんなうちん、人間にも襲い掛かるっちゃないかね」

那美江「日出子奥さん、うち、うち」

日出子「あ、そうじゃったね」

那美江「ほんとん怖（こえ）かったあ。もうよ、いきなりよ、があっちゆつて」

日出子「よう助かったね」

那美江「運が良かった。大きな声出したらびつくりして逃げ出しちいったとよ」

日出子「怪物んくせに、臆病やつちやねえ」

千鶴「那美江さんが咬まれたのは、追い払おうとして手を出したからでしょ」

那美江「それがなんけ？」

千鶴「鮫だつて熊だつて、人間が何もしなければ襲つてはきませんよ」

那美江「なんけあんた、自業自得じゃつち言いてえと？」

千鶴「そうではなくて。怪物と決めつけるのはどうかと思うんです」

那美江「どんげして見てん怪物じやろうが。千鶴さん

やつて姿みたやろ」

千鶴「ええ、まあ」

那美江「あれは怪物じやが。化け物や。さつさと退治すればいいのん」

千鶴「どんな動物も危害を加えようとすれば咬みつきます」

那美江「こんまま放置してまた怪我人が出たら、千鶴さん責任持てつとけ？」

千鶴「そうならないように今日報告会を開いているのです」

那美江「夫婦揃つて怪物ん味方け。言つちよくけん村んみんなは怪物退治に賛成よ。あんたどん夫婦と、所長だけやわ。共生か共存か知らんけん恰好つくくさつちかい」

千鶴「私たちは村の発展のために正式な手順にのつとつていくことを……」

日出子「もうやめんけ」

千鶴と那美江、黙る。

日出子「うつたち村ん者だけぢ話し合つてん行き詰るかい、調査会社ん調査員を雇つたつちやろ。あんだんが言い争つてん、時間ん無駄やが」

千鶴「言い争つてるわけでは……」

日出子「もう決めたやろ。どんげな内容でん今日ん報告会で決まったこつに従うち。駆除か保護か。決定が下さるつまでは待つしかねえとよ」

花、彫り物の下絵を完成させる。

花「できた」

日出子「（見て）花ちゃん、彫り物は何を描くか決まつちよつとよ。勝手なもん描いたらいかんわ」

那美江「なんけ、ちよつとそん絵……」

千鶴「化け物……」

花の作つた彫り物には奇妙な生き物の絵が描かれている。

■第一幕・二場■

公民館の会議室。

七生が先に来て、紙に目を注いでいる。

草野が来る。

草野「酒田先生。お早いですね」

七生「(紙をさりげなくしまう) ああ、すみません、開いてたので勝手に」

草野「どんげですか、調査ん方は」

七生「ああ、はい、皆さん協力してくださるのでとても助かります」

草野「先生お人柄でしょう。初めんほうはみんな、警戒しちよりましたからね。野生動物ん調査員ちゆったら、どんげな変わり者が来るつちやろかつちゆってね。まともで物腰ん丁寧な先生じやつたかい、安心しちよりますよ」

七生「そうですか……あの、いい所ですね、ここ」

草野「(照れる) いやあ。海と山しかないでしょう。退屈じゃないですか」

七生「二日間、調査がてら色々見て回りました。本当、素敵な場所です」

草野「実は十日後、ブルーーツーリズムを開催するんです。先生もいかったら」

七生「ブルーーツーリズム？」

草野「都会ん方に漁村ん暮らしを体験していただくイベントです。漁船で湾めぐりしたり、干物作ったり」

七生「ああ」

草野「目玉はね、坂根神楽とポンポン漁」

七生「ぼ？」

草野「坂根に伝わる伝統的な漁です。釜ん底を叩いち魚を網に追い込む」

七生「そんなのがあるんですね」

草野「一応予約は埋まっちゃうんですけどね、先生なら喜んでご招待させていただきます。どうですか、先生？」

七生「あの、先生はちよつと。ただの調査員なんで」

草野「いやでも、元は獣医じやつたわけでしょう。坂根は漁村ですかい、あんまりお世話にならんですが、家畜獣医師つちゆったら、立派な先生です」

七生「それ、昔の話ですから」

小菅俊一が来る。

小菅「敦之、聞いたけ？ またやられたげなが」

草野「また？ どこですか？」

小菅「岬ん研究所」

草野「ああ、あの老夫婦。干物ですか」

小菅「いや、大根ん漬物じゃわ。樽ごと全部」

草野「悪食じゃねえ」

七生「岬の研究所に人が住んでるんですか？ 無人の

廃墟と聞きましたけど」

草野「ああ、いや、研究所側には小屋みたいな小つち

ええ家があるんです」

七生「漬物樽はどこに？」

小菅「そりゃあんた、家ん裏じゃわ」

須田大次が傘札と連れ立ってくる。

大次「所長と会長は？」

草野「すみません、まだです」

大次「二人とも自覚ん欠くつな。(七生に) 先生、今日
はよろしくお願いします」

阿藤が駆け込んでくる。

阿藤「草野さん、大変大変！」

草野「ああ、所長、どんげしました？」

阿藤「おぼちゃんたちから聞いたんです。岬の研究所」

草野「ああ、はい、今、小菅先生かい」

阿藤「漬物を樽ごとだって？ よつぽどお腹が空いて

たんだなあ。可哀そうに」

小菅「(咳払い)」

阿藤「あ、もちろん被害に遇われたご夫妻も可哀そう
です。食べる方も食べられる方も、みんな等しく
可哀そう」

小菅「(鼻で嗤う) みんな等しく可哀そうね」

阿藤「なんですか？」

小菅「本気でそんげ思つちよつなら、とつとと駆除す
べきでしょう。毎日ですよ。干物やら畑が食い荒
らされちよる」

阿藤「そういう人が動物かっていう短絡的なことでは、

いけないと思うんです。オケラだつてミミズだつ
てアメンボだつて、みんなみんな生きてるんだ、
友達なんだ」

小菅「(遮る) 敦之、始めちくんね」

草野「しかし会長がまだ……」

小菅「あん奴はおらんでんいいやろ」

草野「獣害対策委員会は行政ん長と自治組織ん長、二人
揃つちかい行わんと」

小菅「先代ん会長ならともかく、あん奴じゃねえ。お

つてんおらんでん変わらん」

大次「俊一、口を慎まんか」

小菅「村ん誰も、奴を会長やら思つちよらんわ」

大和がきて入口に立っている。
小菅だけが気づいていない。

小菅 「そんげなこつ大次も分かつちよつやろ。村の者みんな、お前んこつを実質的なふるさと会ん会長つちみなしちよる」

大次 「やめんけ」

小菅 「会社もふるさと会も、全部大次が仕切つちよる。お飾りん会長やら待つ必要ねえわ。さつさと始めち、こん村ん行く末を……」

小菅 大和に気づく。

小菅 「ああ、会長」

大次 「大和、遅えぞ」

大和 「いや、なんか天気いくてよ。ゆつくり歩いてきた」

草野 「(場をとりなす) 全員集まったことやし、始めましょうか」

大次 「まずは酒田先生ん報告からでいいとかえ？」

七生 「あの、先生はちよつと」

草野 「『酒田さん』、これでいいですか？」

七生 「はい」

草野 「それでは酒田さん、お願いしま……」

草野、阿藤が手を挙げていることに気づく。

草野 「どんげしました？」

阿藤 「報告の前にちよつといいですか？」

草野 「ああ、まあ、少しだけなら……なんでしよう？」

阿藤 「(手帳を広げて読む) 坂根集落支援センター所長の阿藤です。このたびは坂根地区で突如多発した野生動物による獣害対策の報告会にご参加いただき、まことにありがとうございます。大潮市役所の支所に代わる小規模な出先機関として集落支援センターが設置されて二年、大きな事故や事件に見舞われることもなくやつてこられたのは一重に住民の皆様の理解とご協力のたまものです」

小菅 「そん挨拶は必要ですか？」

草野 「(手帳をのぞき見し) ああ、これは後でいいかや」

阿藤 「(泣きそう)」

草野 「ああ、あの、そんならそうやね、来週ん坂根だよりに載せましよう。それまでとつておく。ね？」

阿藤 「(まんざらでもない) それならいいかなあ」

草野 「すみません、先生。あ、いや、酒田さん、報告をお願いします」

小菅 「そん前に確認しちよきてえ。こちらん先生ん調査結果にみんな従う。それは分かつちよんな？」

阿藤「もちろんです」

小菅「それが例え、あんたら保護派ん望む結果じゃねえしてもですよ」

大次「保護じゃねえ。共生じゃ」

小菅「どっちでん同じじゃ。駆除が妥当。そんげなつてん文句は言いなんなよ」

阿藤「分かつてます。ただし正規の手順は踏んでいただきますよ。えっと、(手帳を見る)国の定めた野生動物保全基準、県の立てた鳥獣保護事業計画、市の作つた被害対策フローチャート……」

小菅「(七生に)始めちください」

七生「ああ、はい、分かりました」

七生、一礼する。

七生「まず結論から述べますと、坂根集落での野生動物による被害は、野生動物保全基準における第二段階に相当します。よってその対策は行政組織を中心とした追い払い及び侵入防止策の実行。地域住民に対する被害防止策の普及啓蒙活動となります」

小菅「まさか」

草野「酒田さん、それはちよつと……」

阿藤「(草野に)ねえねえ、どういうこと？」

草野「駆除せんで村に入(い)るんなちいうこつです」

小菅「納得いかんわ」

大和「あの、ちよつといいけ？」

大次「なんけ？」

大和「そん保全基準つてなん？」

小菅「二日前、先生が説明しちくれたやろ」

大和「ごめん、聞いちやらんかった」

七生「昨年、環境省を中心に国が定めた基準のことです。人間と野生動物の関係を四段階に分け、それぞれの段階での対応を明確に定義づけた。その方針に基づき都道府県は野生鳥獣保全事業計画をたて、市町村はその計画にそつた野生動物の管理を行います。この基準を無視した場合、法令により罰則を受けることもある」

大次「先生が所属しちよつ調査会社は動物による被害ん状況を調査しちかい、保全基準んどん段階にあるつかを診断しちくれつとよ」

大和「ああ、そういうこつけ」

小菅「(七生に)説明しちくんね」

草野「そ、そうですね。私はてつきり、第四段階か、せめて第三段階やと思つちよつた」

阿藤「(手帳を見て)第三段階は『人間の生活圏に対する動物の執着』」

草野「対応は『放獣を前提にした捕獲』」

小菅「あんやつらはここ一か月ん間にほぼ毎晩現れち

よる。これを執着と言わんでなんち呼ぶんですか？」

七生「第三段階が適応されるのは、行政による効果的な追い払いと侵入防止策が施されていることが前提になります。しかし坂根では……」

大次「集落支援センターは通さんで、住民が各自対策を施しちゃった」

七生「その上、庭で干物を作ったり、漬物樽を家の外に置くなど、集落自体の餌場価値を下げる努力をしています。よって第三段階は適応されないのです」

草野「思わず怒鳴る」うちん妻は！

七生「！」

草野「手を咬まれました。これは第四段階にあたらないのですか？ あたるでしょう？」

阿藤「手帳を見る」第四段階……『野生動物による人への危害』

草野「対応は『安楽死処分』。つまり駆除じゃ」

七生「（首を横にふる）残念ですが」

草野「なんで？ 今も痛がりよつですよ」

七生「奥さんからお話を伺いました。奥さんが咬みつかれたのは、奥さんから先に手を出したから。この場合、動物による攻撃は危害ではなく反撃とみなされます」

なされます」

草野「そんな……」

七生「したがって坂根集落が置かれている状況は第二段階と判断されます」

阿藤「（手帳を読む）『人の生活圏内への野生動物の出没』」

七生「対応は、先ほど申し上げた通りです」

阿藤「村に入らないようにするんですね。（全員に）よし、みんな頑張りましょう」

小菅「駆除やろ、普通」

大次「俊一、調査結果に従え。敦之もじゃ」

草野「……」

大和「あ、ねえねえ、俺と宇いつちゃんは無視？」

大次「大和も、牟礼のおつさんも、いいね？」

牟礼「（無言）」

大和「まあ、俺はどつちでんいいけんねえ」

大次「（全員に）先生には被害状況ん診断んほかに、被害対策ん計画立案を依頼しちよる。そちらについてん今、お聞かせいただけますか？」

七生「あ、はい。大枠であれば。ただ……実は一つ、大事なことが分かっているんです。この村に現れている動物はいったい何ですか？」

大次、答えない。

沈黙。

七生「……この村に来て二日、被害現場の調査や聞き込みを行いました。しかし出沒する野生動物についてだけ手がかりが得られないんです。誰に聞いても暗かったから姿が見えなかったと答える。これはなぜですか？」

大次「先生、申し訳ねえけん、対策方法だけを教えてくださいだくこつはできませんか？」

七生「野生動物の追い払いや侵入防止は、生態によつて異なつてきます。侵入防止の電気柵ひとつとつても、猿と猪では違つたものを用意しなくてはならない」

阿藤「どんな動物にも効く方法はないんですか？ 万能電気柵とか」

小菅「ほんとん分からんとよ。夜行性で暗えなつちかいしか現れん。しかも素早え」

草野「何度か捕獲も試みたつとですが、あつちゅう間に逃げられちしまつて」

七生「であれば、定点カメラを設置して姿を撮影しましょう。幸いこの二日間の調査で侵入経路は分かっています」

大次「……狸」

七生「はい？」

大次「狸なんです。みんなはつきりとは見ちよりませんか」

草野「ああ、そうですね。うちの妻も狸んごつあつたち話しちよりました」

小菅「そう言われちみつと、狸ん咬まれた傷ん似ちよつたな」

阿藤「え、狸なの？」

七生、無言でビニル袋を取り出す。

七生「（大次に）須田さん、昨日あなたの干物工場で拾いました」

大次、無言で受け取る。

阿藤、小菅、草野も覗き込む。

七生「野生動物による被害の場合、現場には必ず何かしらの痕跡が残っています。足跡、糞、体毛。しかしどの現場にもそれらしきものはなかった。まるで丁寧に掃除をした後のように綺麗だった。それが唯一手に入れた手がかりです」

大和「何を見つけたと？」

七生「鱗です」

阿藤「干物工場なら魚の鱗くらい……」

七生 「拾ったのは干し場です。鱈、とりますよね、干す前に。それにその大きさ。鱈一つがそれくらいあるなら、体長は二メートルに迫る。そんな巨大な魚が干し場にいるんですか？」

大和、大次たちに近寄り、ビニル袋を取り上げる。

大和 「ああ、だめじゃが、大次叔父さん。これはもう誤魔化せん。こんげでけえ鱈を持った魚、干物にせんじゃろ」

大次 「大和、黙らんか」

大和 「もう隠すのやめようや」

大次 「気まぐれぢものを言うな」

大和 「こん人なら大丈夫じゃって」

大次 「うるせえ！」

大和 「……なんけ、俺、一応ふるさと会の会長やつちやけど」

大次 「じゃったらなおさら……（話せない事情が）分かっやろ」

七生 「……先ほど、誰に聞いても暗くて姿が見えなかったと答えたと言いました。でも一人だけ、何を見たのか、はつきり教えてくれた人がいたんです」

全員が緊張して七生を見る。

七生 「その人は丁寧に絵まで描いてくれた。でも僕には信じられなかった」

七生、冒頭で見ていた紙を広げる。
足の生えた魚の絵が描かれている。

七生 「初めはからかわれているのかと思いました。魚にトカゲのような足が生えている」

小菅 「誰がそんな……」

七生 「名前は明かせません。ただその人ははつきりと証言しています。足の生えた魚が村を侵している。これは作り話なんですか？ それとも……」

大次 「……敦之、写真」

草野 「いいとですか？」

大次 「うちん会長はいいつつちゅつちよる」

草野 「(阿藤を見る)」

阿藤 「え、あ、どうしよう、いいのかな？」

草野 「所長が決むっこつです」

阿藤 「そうだよね。うん、じゃあ、そうだな、お見せして」

『百年の雪』
ひやくねん
ゆき

『百年の雪』

【登場人物】

■平成編■

光村隼人（みつむら・はやと）……中学校の理科担当非常勤講師。翁次郎の曾孫。
光村輝美子（みつむら・きみこ）……八王子市役所・環境保全課。隼人の母。輝夫の長女。
光村日向子（みつむら・ひなこ）……文部科学省大臣官房付。宇一の孫で章太郎の姪。
十日市望（とおかいち・のぞみ）……光村製作所・宇宙開発部門、研究員。十日市秀政の孫。
栗本悠（くりもと・はるか）……日本SEETI研究所・研究員。栗本寛治の孫。

■昭和編■

光村輝夫（みつむら・てるお）……光村製作所、社長。
翁次郎の五男。
光村美和子（みつむら・みわこ）……その妻。光村製作所、専務。
堀越郎（ほり・えつろう）……光村製作所、技術開発

部門・主任。

光村章太郎（みつむら・しょうたろう）……通産省・航空武器課、課長補佐。宇一の末息子。
十日市秀政（とおかいち・ひでまさ）……八王子南野工科大学、航空工学博士。孝造の弟子。
栗本寛治（くりもと・かんじ）……防衛庁技術研究本部航空機担当・防衛技官。孝造の孫。

■大正編■

光村翁次郎（みつむら・おうじろう）……光村飛行機、設計主任。
光村宇一（みつむら・ういち）……光村飛行機、社長。
翁次郎の兄。
光村鈴子（みつむら・すずこ）……宇一の妻。
栗本孝造（くりもと・こうぞう）……光村飛行機、設計技師。
成田冬（なりた・ふゆ）……光村飛行機の女中。
神井睦月（かみい・むつき）……月読新聞社の婦人記者。

■第一幕・一場

二〇一五年、二月二十二日。光村製作所、旧館の資料室。

長机と数脚の椅子があるだけ。窓の外では雪が降っている。

机の上には本やノート、空飛ぶ円盤の模型、スノードームなど。

光村隼人が入ってくる。

隼人、UFOの模型に近寄ると手を伸ばす。

懐かしみと痛みのせいで触れられない。

栗本 悠が入ってくる。

悠 「……アダムスキー型」

隼人 「……？」

悠 「その円盤。……見れば見るほどそっくりです」

隼人 「え？」

悠 「八王子のUFOに」

隼人 「……未確認飛行物体」

悠 「？」

隼人 「正体不明ってだけでUFOイコール宇宙船ではありません。人工衛星かもしれないし、どこかの国の新型兵器の可能性だって」

悠 「あれは、未知の惑星からやってきた宇宙船」

隼人 「八王子に？」

悠 「八王子に、空飛ぶ円盤が現れてはいけませんか？」

隼人 「他にもつと行くべき場所があるでしょう」

悠 「理由があるんです、きっと」

隼人 「理由？」

悠 「アダムスキー型なら乗っているのは金星人。ということは地球に核爆弾の放棄を忠告しに来た」

隼人 「だったら国会にでも行けばいい」

悠 「八王子は非核平和都市宣言してるから。ほら？」

隼人 「宇宙人なんていません」

悠 「います。カール・セーガンがドレイクの方程式で割り出した試算によると、生命体の存在する惑

星の数は推定……」

隼人 「百万」

悠 「……」

隼人 「でも僕は認めません」

茶器を載せた盆を持って輝美子が来る。

輝美子 「悠さん、お茶、いかがですか」

悠 「ありがとうございます」

輝美子 「隼人もどう？」

隼人 「あとで」

大きな花束を手に、派手な身なりの日向子が来る。

日向子「控室はここ？」

輝美子「日向子さん。お久しぶりです」

日向子「八王子って寒いね。東京じゃ雨なのに、雪

だからびつくりしちゃった」

輝美子「花束を受け取って」道、大丈夫でした？」

日向子「すごい混んでた」

輝美子「隼人、日向子さん」

隼人「どうも」

日向子「相変わらず探してるの、宇宙人？」

輝美子「今は中学校で理科を教えるんですよ。こち

ら（悠）、栗本さんのお孫さん」

悠「栗本 悠です」

くたびれた花束を手に、十日市 望が駆け込んでくる。

望「ほわたたた！ 遅くなつてすみません、あの、慰霊祭、終わっちゃいました？」

輝美子「大丈夫、まだ始まっていませんよ」

望「よかったあ……（案内状を探す）あの、わたし、

十日市秀政の孫の……（見つける）あった、望です。（部屋を見て）会場は……ここですか（息が切れている）？」

輝美子「まあまあ落ち着いて。お茶、入れましょうか？」

望「すみません、歩いて登ってきたから……」

悠、珍しそうに部屋の中を見回している。

日向子「すごいでしょ、この部屋」

悠「噂には聞いていたんですが……これ全部UFOの？」

日向子「そう」

悠「（読み上げる）『UFO隠蔽工作の謎』『UFOと

宇宙人』『UFO辞典』『空飛ぶ円盤完成近し』『超

相対性理論』……わああ……」

日向子「光村製作所のトンデモ資料室」

悠「すばらしいです」

輝美子、式次第を配り始める。

輝美子「全員揃ったようなので、自己紹介と、予定の説明をさせていただきます」

輝美子、一礼。

輝美子「お忙しい中、光村製作所・爆発事故犠牲者慰霊

祭にご参加いただき、ありがとうございます。慰霊祭の世話役を務めさせていただきます。光村輝美子と申します。事故犠牲者の一人、光村輝夫の娘です。よろしく願います。では……（と隼人に自己紹介を促そうとする）

日向子「（立つ）光村本家の日向子と申します。（堂々と）先日、文部科学省大臣官房付を拝命しました。当時通産省官僚で事故に巻き込まれた光村章太郎の姪にあたります。日向子さんとは、はとこ同士です。よろしく」

輝美子「それじゃ、隼人」

隼人「光村隼人です。事故で亡くなった光村輝夫の孫です」

輝美子「わたしの息子です。（望に）次、お願いしてもいいですか？」

望「と、十日市望です。光村製作所の宇宙航空開発部門に所属しています」

日向子「……！」

望「事故で亡くなった十日市秀政の孫です。五十年の節目ということで、今回初めて参加します。よろしく願います」

悠「（立つ）栗本悠です。日本SETI研究所で研究

員をしています」

望「せち？」

悠「地球外文明探査を目的とした研究施設です」

望「あの、つまり……」

悠「宇宙人を探しています」

日向子「隼人くんと一緒ね」

悠「（納得）そうなんですか」

輝美子「去年辞めたんですけどね」

悠「ではわたしと入れ違いですね。事故の生存者である栗本寛治の孫です。その祖父も昨年亡くなり、今日は代わりに参加しました。よろしく願います」

輝美子、悠に会釈。

輝美子「この後の予定ですが、正午にあちらの食堂へお集まりください。こちらにお集まりいただいた遺族の方と、食堂で待機されている当時の従業員の方とで親睦のための昼食会を行います。その後、十三時十分前にこの建物の前に集合。マイククロバスで慰霊祭の会場へ移動します」

日向子が手をあげる。

輝美子「（警戒）何かご不明な点でも……」

日向子「私にも挨拶させてよ。本家の人間がしないなんて、お二人に失礼でしょ？」

日向子、輝美子の立つ場所を奪う。

日向子「皆さんご存知の通り五十年前の今日、光村製作所高尾山研究室で不幸な爆発事故が起きました。わたくしの叔父で本家の光村章太郎をはじめ、分家の輝夫、開発研究に携わっていた他二名の方が尊い命を失った。当時、光村製作所では国産ロケットのエンジン開発に心血を注いで……」

式次第を見ていた望、「ほわ！」と悲鳴をあげる。

輝美子「どうかしました？」

望「あ、いえ、その……慰霊祭の会場って、事故現場ではないんですか？」

輝美子「事故現場の少し手前に、慰霊碑を建てた広場があるんです。慰霊祭はそちらで」

望「事故現場には入れないんですか？」

輝美子「事故以来ずっと、立ち入り禁止なんです」

望「でも、慰霊祭ですよ？」

日向子「大きな穴が開いているのよ。（輝美子に）そう

でしょ？」

輝美子「爆発で直径二十メートル、深さ十メートルの穴ができたと聞いています」

日向子「そのせいで地盤がもろくなっていて、近寄るのは危険なの」

望「そんな……見るだけでも駄目ですか？」

輝美子「ごめんなさい」

隼人「いいんじゃない、見るくらいなら」

輝美子「隼人」

隼人「赤の他人ならともかく、遺族なんだよ」

輝美子「何かあったらどうするの？」

隼人「僕がついていく。危なくないように気を付けるよ」

輝美子「駄目です、いけません」

隼人「（望に）慰霊祭の会場まで車ですぐだから……」

輝美子「（怒鳴る）隼人！」

沈黙。

輝美子「望さん、ごめんなさい、この話はもういいですか？」

望「……」

輝美子「それでは慰霊祭の流れについてご説明しま……」

悠 「あの……」

輝美子 「なんです？」

悠 「事故のあった場所に入れないのはなぜなんでしょう？」

輝美子 「ですから危険だと……」

悠 「本当は爆発事故なんてなかったんじゃないかもしれませんか？」

輝美子 「はい？」

悠 「五十年前、光村製作所で爆発事故は起こらなかった」

輝美子 「何をおっしゃっているのかよく分からないのですが……」

日向子 「あつたわよ。事故は確かにあつた。開発中のロケット用エンジンが爆発したの。消防署も駆けつけたし警察の捜査もあつた。記録だつて残ってるわ」

悠 「でもご遺体は見つかっていないんですよ？」

日向子 「……」

悠 「実はこちらに何う前に調べたんです。事故の状況にはいくつか不審な点がある」

輝美子 「悠さん、今日は慰霊祭なの。そういう話は……」

……

望 「あの、わたしもそう思います」

輝美子 「望さん？」

望 「爆発事故はなかった」

日向子 「あなた、光村製作所の従業員でしょ！ わきまえなさい！」

望 「だって、おかしいことがたくさんあるんです。事故の前に目撃された光とか、空に向かって降った雪とか」

日向子 「馬鹿馬鹿しい。尾ひれのついた噂話じゃない」

隼人 「そう思うんだつたら、事故現場に案内してあげれば？」

輝美子 「隼人」

隼人 「こういう噂が立つのも、事故現場が封印されているから。違う？」

輝美子 「いい加減にしなさい。あなただって知らないわけじゃないでしょ」

隼人 「何を？」

輝美子 「事故現場の封印は……お祖母ちゃんの遺言なのよ」

隼人 「分かつてるよ」

隼人、悠に向かう。

隼人 「栗本さん。あなたの考えを聞かせてください。

爆発事故がなかったのだとしたら、なぜ事故現場は封印されているのでしょうか？」

悠 「……」

隼人「(望に) あなたは？」

望 「…… UFOの工場があるから」

日向子「はあ？」

隼人「栗本さん？」

悠 「わたしも同じです」

日向子「二人とも正気なの？」

隼人「有名な都市伝説です。光村製作所高尾本社の敷地には、空飛ぶ円盤を作るための工場が隠されている」

日向子「くだらない。あなたたち、それを鵜呑みにしてるわけ？」

望 「わ、わたしだって今までは信じていませんでした。でも……」

悠 「八王子にUFOが現れた」

望 「だったら、UFOの工場だってあるかもしれない」

日向子「要するに興味本位でここへ来たわけ？ 不愉快だわ。帰りなさい」

悠 「それは違います。少なくとも興味だけで来たのではありません」

日向子「だったら何よ？」

悠、一冊のファイルを取り出す。

悠 「これを見てください。光村製作所の前身、光村飛行機が設立されたときの写真です」

日向子「それが何？」

悠 「この写真は百年前、この部屋で撮られました。窓のところを見てください。奇妙なものが写っています」

悠

輝美子、日向子、不承不承といった様子で拡大写真を見る。

息を飲み輝美子、いぶかしむ日向子。

輝美子「……これ、もしかして」

日向子「UFO？」

悠 「アダムスキー型。この円盤の真下には、五十年前の爆発事故現場があります。そして同じ形の円盤が今、八王子の上空に現れた。けして偶然ではありません。すべてが繋がっている。そう考えられますか？」

悠、輝美子に向かう。

悠

「この資料室は事故の後、輝美子さんのお母さん、光村美和子さんが会議室を改造して作られた。そ

うですよね？」

輝美子「……はい」

悠 「わたしの祖父は事故後、アメリカのSETI研究所に多額の資金援助をしています。日本SETI研究所が設立されると、やはり資金提供を始めました。それは美和子さんも同じです。二人は事故の後ずっと、宇宙人を探していた。美和子さんにいたってはこんな資料室まで作った。それはなぜです？」

輝美子「……」

悠 「五十年前、爆発事故は起こらなかった。その代わりもつと別の何か、宇宙人や空飛ぶ円盤が関わる何かがあつたに違いありません」

隼人 「例えば空飛ぶ円盤の工場が作られた」

悠 「はい」

隼人 「僕はそうは思いません」

悠 「？」

隼人 「百年前の円盤も、五十年前の爆発事故も、今現れたUFOも、すべては宇宙人と無関係です。どれもこれも説明可能だ。僕は認めません」

隼人、悠と対峙する。

第二幕へ続く。

■第一幕・二場■

一九六五年、一月二〇日。

光村製作所の会議室。

机と数脚の椅子があるだけ。窓の外では雪が降っている。

机の上には本や図面、書類の束、ロケットの模型やスノードームなど。

光村美和子がロケットの模型を見つめている。制服姿の栗本寛治が来る。

寛治「……美和子さん？」

美和子「ご無沙汰しております」

寛治「どうして……」

美和子、名刺を手渡す。

寛治「（受け取り）……専務」

美和子「社長はじきに参ります。お掛けになつてお待ちください」

寛治「美和子さん、あの……」

美和子「お元気でしたか？」

寛治「……はい」

美和子「ご立派になりましたね」

寛治、何か言いたいが言葉が見つからない。堀越郎に導かれ、光村章太郎と十日市秀政が来る。

堀「専務、社長はまだ（来てませんか）？」

美和子「頭痛がするので少し遅れると」

堀「まだですか、もう。（章太郎と秀政に）すみません、少しだけお待ちいただけますか？」

章太郎「僕は構いませんよ。輝夫ちゃんの遅刻癖には慣れっこだ。栗本くん、早いね」

寛治「先に着いてしまいました」

章太郎「美和子さん、今日はお忙しい中、無理を言つて申し訳ない。（秀政を指して）こちらは十日市先生。八王子南野工大で航空力学を研究されています」

美和子「ご高名は存じております。光村美和子と申します」

章太郎「（秀政に）専務、というより実質的な社長だね」

秀政「（ロケットの模型にくぎ付け）それは、RV3号機でしようか？」

美和子「え？ ああ、はい」

秀政「いいロケットでした」

堀「RVのエンジンはうちが開発したんです。社長

が設計の陣頭指揮をとりましてね

秀政「どうして飛ばなかったのかなあ？」

章太郎「設計に問題があったんだ。（寛治に）なあ？」

美和子「輝夫を呼んでまいります」

光村輝夫が来る。

輝夫「（美和子を押しつけ）待たせた。始めよう。自己紹介はなくていいな」

章太郎「いるよ、初対面だろ。（寛治と十日市に）こちら、光村製作所の社長、光村輝夫くん。かの有名な光村翁次郎氏のご子息で、僕の従兄です。十日市先生は……」

輝夫「知ってる。YS11んときは親父が世話になったそうで」

秀政「ああ、いえ、こちらこそ」

輝夫「（寛治を見て）あんたは？」

寛治「防衛庁技術研究本部で航空機の研究を担当しています。栗本寛治です」

輝夫「専務で細君の美和子と、技術開発部門の堀だ。主に二人が話を聞く」

寛治「これから話す内容には防衛上の機密事項が含まれています。申し訳ありませんが美和子さんには席を外していただきたい……」

輝夫「（遮る）我が社の経営はこいつに任せている。い

ずれ耳に入るんだ。同席させないのは時間の無駄

だろ」

章太郎「だってさ」

寛治「しかし……」

輝夫「（章太郎に）で、なんだ、相談って？」

美和子「機密保持のため、直接お話しされると伺いました」

章太郎「非常に微妙な問題だね。もしかしたら信じてもらえないかもしれない」

堀「なんすか、ちよつと、もったいぶらないでくださいよ」

章太郎「栗本くん」

寛治、無言で紙ばさみを差し出す。

章太郎「まあ、まずは読んでみてくれ」

受け取る輝夫。美和子、堀が見えるように紙ばさみを広げる。

美和子「……新聞、ですか？」

堀「一九四四年、十二月……何語ですか、これ？」

輝夫「フランス語だ。こっちはドイツ語か」

美和子「この記事は英語ですね」

堀「一九四五年、一月……」

寛治「それらの記事の内容はほぼ共通しています」

美和子「読む」戦闘機の操縦士が、謎の光を見た……
フーフアイター？」

堀「なんですかね？」

寛治「第二次世界大戦末期、戦闘機のパイロットたちに
目撃された未確認飛行物体です」

堀「ああ、UFO」

寛治「謎の光が突然現れ、機体すれすれを飛び去って
いく。敵の飛行機なのか、もつと別の存在なのか。
正体は突き止められていません」

輝夫「話の趣旨がまるで分からん。これが何だ？」

寛治「次はこちらを」

寛治 図面を差し出す。

輝夫、受け取って一瞥するや顔色が変わる。

美和子「何かの機械……兵器、ですか？」

堀「読む」『おに』……『りゅう』？」

寛治『鬼龍』。先の戦争で極秘裏に我が国が開発した戦
闘機です」

堀「(図面を見て) 飛行機なんですか、これ？」

美和子「翼がありませんね」

堀「まるで空飛ぶ円盤だ」

寛治「鬼龍の性能は当時の航空技術の常識を大きく超え
ていました。空中を高速で自在に移動し、レーダ
ーに捕捉されることなく敵陣の中へ突然現れる」

堀「なんだかフーフアイターみたいですね」

寛治「最後にこれを」

寛治、日記帳を差し出す。

寛治「鬼龍の開発者の日記です。ふせんのあるペー
ジを読んでください」

輝夫、受け取る。しかし開かない。

美和子「あなた？」

輝夫「……読め」

美和子「はい……(受け取り日記を開く)……『大正
四年一月二十三日。研究室の裏山に怪しい光が落
ちる』(ページをめくる)『光の正体は金属製の物
体。高さ一丈、幅四丈。形は円い皿を伏せたるが
ごとし』」

堀「これって鬼龍ですか？」

章太郎「鬼龍が作られたのは昭和十九年。その日記が書
かれた三十年後のことだ」

『あで
艶やかな
ほね
骨』

『艶やかな骨』

【登場人物】

(男性バージョン)

楠木裕人(くすのき・ゆとり)……東京都保健衛生局食糧保全部・食物アレルギー調査官。

根村保(ねむら・たもつ)……都立緑化技術研究センター・生産開発部第三課・研究員。

越谷駿夫……(こしがや・としお)同・課長。

修善寺臣人……(しゅぜんじ・おみと)同・主任研究員。

笹原恵一……(ささはら・けいいち)同・総務部係長。

司馬肇……(しば・はじめ)NPO法人りんの会・事務局広報企画担当。

(女性バージョン)

楠木ゆとり(くすのき・ゆとり)

根村保(ねむら・やすみ)

越谷俊子(こしがや・としこ)

修善寺佳乃(しゅぜんじ・よしの)

笹原恵(ささはら・めぐみ)

司馬初江(しば・はつえ)

【時】

二〇二七年、八月。

【場所】

渋谷区にある都立緑化技術研究センター、十七号研究室。

二〇一七年、八月のある日。

渋谷にある都立緑化技術研究センターの十七号研究室。

それほど広くはなく、簡素な机や棚が置かれている。

棚に並ぶ研究用の野菜や稲の苗。

慎重に調整された照明の光が苗に降り注いでいる。

室内の中央にそびえる樹木のような植物。

水槽のような容器から生え出ている、上部の枝は天井を這っている。

目を凝らせば、それがたくさん植物の茎や幹が集まったものであることがわかる。

濃く茂る葉の間に、瑞々しい果実が覗いている。ナスやウリなど、無骨だが生命力みなぎる、野

趣に富んだ野菜。

根村 保が植物を見つめている。

考える時の癖なのだろう。手がせわしなく動いている。折り紙をしているらしい。

楠木 ゆとりがくる。

楠木 「……根村」

根村 「楠木くん。久しぶり」

楠木 「やつぱり君か」

根村 「来るんじゃないかと思ってた」

楠木 「訊きたいことがあるんだ」

根村 「どうぞ」

楠木 「君は、ここで何をしているんだ？」

根村 「見ての通り、研究だよ」

楠木 「何の？」

根村 「……」

楠木 「何の研究だ？」

根村 「自然栽培の技術化と植物工場への応用」

楠木 「根村」

根村 「本当だって。この研究が成功したらすごいんだ。どんな小さな家ででも、室内で簡単に野菜や米を

育てられる。都市で手軽に自給自足の生活が送れるようになるんだ。しかも安全で美味しい。渋谷から日本の食料自給率を向上させる。すごい計画でしょ」

楠木 「大宜（おおぎ）村へ行ってきた」

根村 「……」

楠木 「知ってるんだろ、徳島県の太宜集落。君は五年前、調査団の一員として訪れている」

根村 「どうだったかなあ」

楠木 「村は消えたよ」

根村 「消えた？」

楠木 「地図から消えた。君たちが帰った半年後、村人

が全員、死んでしまったんだ」

根村 「……」

楠木 「死因は餓死。七人の村人が全員、飢えて死んだ」

根村 「五年も前のことだろ。行ったとしても覚えてないなあ」

楠木 「去年、ここの前のセンター長、上野博士が亡くなった。死因はやはり餓死。しかし亡くなったのは山奥の集落ではない。東京の、設備の整った病院でだ。食べる物ならたくさんあったのに、どうして餓死したんだ？」

根村 「さあ、なんでだろう」

楠木 「看取ったんだろ。上野博士」

根村 「……」

楠木 「何があったのか教えてくれないか」

根村 「楠木くんには関係ない」

楠木 「ある。あるからここに来た。俺は、止めなければならぬんだ」

根村 「止める？」

楠木 「東京を中心に今、子どもたちの間で野菜や穀物が原因の食物アレルギーが増えている。その子どもたちの共通点を、俺は見つけた」

楠木、そびえたつ樹木のような植物群を指す。

楠木 「緑化技術研究センターでは試験のために栽培した野菜を定期的に販売している。最近では渋谷野

菜と呼ばれて人気なんだろ？」

根村 「ここの野菜が原因だって言いたいんだ？」

楠木 「俺はそう考えている」

根村 「僕たち職員はみんな、ほとんど毎日、ここで採れた野菜を食べている。ここができてから五年間ずっと。でも誰一人、アレルギーを起こしてはいない」

楠木 「子どもは大人に比べてアレルギーを起こしやすい。それくらいわかっているだろ」

根村 「……」

楠木 「野菜アレルギーの急増、上野博士の死、大宜村の集団餓死事件。そのすべてに根村、君が関わっている」

根村 「偶然だ」

楠木 「自然栽培の技術化って言ったな。でも本当にこの野菜は安全なのか？ もう一度訊く。君はここで何をしているんだ？」

根村、楠木を見返す。

対峙する根村と楠木の姿。

笹原がくる。

笹原「根村くん、大変だ、楠木がこちらに向かつてる
つて……」

笹原、楠木に気づく。

笹原「楠木さん」

楠木「お邪魔しています」

笹原「今日はいったい何の用です」

楠木「聞き取り調査に参りました」

笹原「調査は終わったんじゃないんですか？」

楠木「新しい事実がわかったんです」

笹原「申し訳ないが、記者発表の準備で忙しい。今日
は帰ってください」

楠木「記者発表？」

笹原「オオゲツの品種登録が正式に認められたんです」

楠木「オオゲツって、屋上で栽培しているあの稲です
か？」

笹原「根村さんの努力がやっと実った。わたしたちの
計画もこれで一歩前進です」

楠木「発表はさせません。会見を中止にしてください」

笹原「はい？」

楠木「あの稲を、外に出すわけにはいかないんです」

笹原「何の権限があつて」

根村「楠木さんはね、ここで作る農作物が食物アレル

ギーの原因だつて考えているんですよ」

笹原「前回いらした際、説明したでしょう。当センタ
ーの作物は、農薬も化学肥料も使わず育てていま
す。アレルギーが起きるはずがない。あなたも納
得してたじゃありませんか」

楠木「どこか部屋をお借りできませんか」

笹原「あいにく、どの部屋も塞がっております」

楠木「お願いします」

出ようとする笹原。楠木が回り込み立ち塞がる。

笹原「ちよつと……」

根村「ここを使えば」

笹原「根村くん」

根村「大丈夫、ここの野菜は食べるわけじゃない。僕
は気にしません」

笹原「そういうことを言ってるんじゃないんだ」

根村「疑いを取り除いてあげましょう」

笹原「一時間後には都庁の担当者が打ち合わせに……」

根村「(楠木に) すぐに済むんだろ？」

楠木「(頷く)」

根村「笹原さん」

笹原「……わかりました。課長を呼んできます」

笹原、出て行く。

根村「徳島はどうだった？ 今頃は、阿波踊りですごいのかな」

楠木「いつ決めたんだ、記者発表？ 前、来たときは誰もそんな話、してなかった」

根村「今朝、急に決まったみたいだよ」

楠木「俺が徳島に行ったからか？」

根村「……」

楠木「やり方が少し汚いんじゃないか」

根村「真似をしたんだ」

楠木「真似？」

根村「楠木くん、僕に同じようなことをしただろ？」

楠木「……」

根村「昔すぎて覚えてないかあ」

越谷と修善寺がくる。

越谷「（楠木に）記者発表を中止しろなんて、どういうつもりだい」

楠木「いくつか新しい事実がわかったんです」

越谷「いきなりやってきて強引に呼びつけて。食料安全保障部には正式に抗議するからね」

修善寺「越谷課長、話だけなら聞いてあげてもいいで

はありま……」

越谷「（遮る）修善寺くん、彼が来るとね、妙な噂が立って困るんだよ」

修善寺「（楠木に）すぐに済むよね？」

と、笹原が駆け込んでくる。

笹原「課長」

越谷に耳打ちする笹原。

越谷「本当に？」

笹原「もうそこにいらしてます」

越谷「断りなさい」

笹原「断ったんですが、どうしても今日にかぎってすご頑固で」

根村「どうしたんですか？」

笹原「司馬さんが来てる。聞き取り調査に同席したいらしい」

越谷「駄目だよ、駄目。追い払って」

根村「同席してもらいましょう」

越谷「根村くん」

根村「断れば、妙な疑いをもたれるかもしれませんが」

越谷「関係のない人間がいちゃ、楠木くんだって迷惑

だろ」

楠木「すみません、司馬さんというのは？」

修善寺「りんの会の職員です」

楠木「りんの会？」

修善寺「食の健全化を目的に活動している……」

楠木「(遮る) 確か、NPO団体の」

修善寺「先月から僕らの計画に協力してくれています。

とても勉強熱心な青年で……」

越谷「(遮る) 何も知らないってことだろう。かえって

混乱が生じる」

楠木「いや、むしろ中立公平な立場で話を聞いてくれ

ると思います」

根村「だ、そうですよ」

笹原「どうします？」

越谷「……好きにしないかい」

笹原、戸口にいつて司馬を通す。

司馬がきて、楠木に一礼する。

司馬「りんの会の司馬です」

楠木「東京都衛生保健局食糧安全保障部の楠木と申しま

す」

司馬「食物アレルギー担当の調査官だと伺っています

が」

楠木「はい」

司馬「僕はまだ食糧問題について勉強を始めたばかり

です。色々とわからないことがある。僕たちの計

画に何か不備があるのならぜひ教えてください」

笹原「そろそろ始めませんか？」

根村「楠木くん」

楠木「ああ」

楠木、全員を見渡せる位置に移動する。

楠木「三か月ほど前のことです。都内を中心に関東地

方で野菜や穀物によるアレルギーの発症報告が

増え始めました。発症したのは二歳から十三歳ま

での子どもたち。しばらくの間は原因がわからず、

食中毒の可能性が疑われていました。というのも、

アレルギーを引き起こした野菜はアレルギーン、つ

まりアレルギーの原因としてはあまり一般的で

はなかったからです。食料安全保障部が事態を把

握したのは先月の中ごろ。野菜アレルギーが各地

に広まって二か月が経つてからのことです。保健

所や各医療機関からの報告を取りまとめ、食物ア

レルギー対策担当課による調査を開始。その時に

はすでに百人を超す児童が、野菜によるアレルギー

ー反応を起こしていました」

上演記録

『花と魚』

2011年7月28日(木)～31日(日)

@シアターバビロンの流れのほとりにて

脚本・演出：柳井祥緒

出演：北川義彦(十七戦地)／

稲輪吉泰、植木希実子(Bobjack theater)、

鶴沼ユカ、小林祐真、坂本なぎ、佐藤幾優、

真田真隆、杉村こずえ、向原 徹(タテヨコ企画)、

柳澤有毅

2013年9月12日(木)～17日(火)

@王子小劇場

脚本・演出：柳井祥緒

出演：北川義彦、藤原 薫(以上、十七戦地)／

小林祐真、佐藤幾優、

佐糖勇樹(ロックンロール・クラシック)、

真田真隆、澤口 渉(ロデオ★座★ヘヴン)、

鈴木理保、浜野隆之(下井草演劇研究舎)、

峯岸のり子、宮地成子(劇団黒テント)

2014年12月12日(金)～14日(日)

@座・高円寺1

脚本・演出：柳井祥緒

出演：北川義彦、柳澤有毅、藤原 薫

(以上、十七戦地)／

植木希実子(Bobjack theater)、真田真隆、

澤口渉(ロデオ★座★ヘヴン)、鈴木理保、

関根信一(劇団フライングステージ)、

鶴町 憲、浜野隆之(下井草演劇研究舎)、

森尾繁弘

『百年の雪』

2012年2月23日(木)～27日(月)

@王子小劇場

脚本・演出：柳井祥緒

出演：北川義彦(十七戦地)／

植木希実子(Bobjack theater)、鶴沼ユカ、

江島朋洋、小林祐真、坂本なぎ、真田真隆

新紗、鈴木理保、篁 紗耶、永松昌輝、林 有紀、

藤原 薫、松下岳志(ケシュ ハモニウム)、

宮本敏和、柳澤有毅、吉田海輝

『艶やかな骨』

2012年8月14日(火)～26日(日)

@Gallery LE DECO 4

(ギャラリー・ルデコ4)

脚本・演出：柳井祥緒

出演：【A version (女性版)】

植木希実子(Bobjack theater)、大竹絵梨、

篁 紗耶、坂本なぎ、鈴木理保、藤原 薫

【B version (男性版)】

北川義彦、柳澤有毅(十七戦地)／

佐藤幾優、三原一太(はらぺこペンギン!)、

宮本敏和、向原徹(タテヨコ企画/せし-おんど)

柳井祥緒（やない・さちお）……劇作家／演出家

1979 年 11 月 17 日、東京都出身。B 型。

2001 年、演劇企画ミルク寺を旗揚げ。主宰・作・演出として 2009 年の解散までに全 12 作品を手がける。

現在は、十七戦地の戯曲・演出を担当するほか、外部劇団への脚本提供、演出も多数手がける。

2011 年、十七戦地 #1 公演に書き下ろした戯曲『花と魚』が、

第 17 回劇作家協会新人戯曲賞を受賞。

2015 年、「ウルトラマン X 第 10 話 怪獣は動かない」の脚本を執筆する。

十七戦地（じゅうななせんち）

東京を拠点に活動する劇団。

俳優・北川義彦と劇作家／演出家・柳井祥緒を中心に 2010 年結成。

ファンタジーや SF、歴史や民俗などの題材を扱いつつ、

市井の人々の暮らしや葛藤を表現。

壮大なイメージを喚起させる情景を描き、現実と地続きの幻を立ち上げる。

最近では、スピーディーな対話で事件の真相を暴いていく

「論争劇」と呼ばれる作風を得意とする。

柳井祥緒 戯曲集 1
2015 年 11 月 11 日発行

著者 柳井祥緒

発行 十七戦地

050-3716-1717
inquiry@17cm.info
<http://17cm.info/>

乱丁・落丁本はご面倒ですが上記までご連絡ください。
お取り替えいたします。

©Sachio Yanai ©17cm Printed in JAPAN